

帰国子女のひとりとして
母として

塚田 幸子



日本の三月は卒業、転勤の季節、世論調査によると私たち日本人は長い間親しんできた、この季節と行事の結びつきを変えたいとは思わない人が多数だということ。これは私には驚きでした。夫の海外転勤で三年間デンバー（アメリカ）に暮らすという体験のためばかりではなく、私は、一年中で最長の休みを年度の途中にはさみこむよりも、子供たちを学校から解放し、家族の元へ帰してほしいと思うのです。

ご承知のように、デンバーでの子どもたちの夏休みは二か月半もあり、我が家でも大いに家族旅行を楽し

むことができずました。高いお金を払わなくても、車とキャンプでアメリカやカナダの国立公園巡りをして大自然を満喫することができたのは、本当に有難いことでした。カナダやアメリカのキャンプ場はほとんどがオートキャンプ場で、自分の車の横にテントを張ることができ、ベンチ、テーブル、ファイヤープレイスが付いていて、大変快適です。所によっては温水シャワーの設備さえありました。キャンプ場は国立公園ばかりでなく、州立のものや民間のものも多くて安上がり旅行ができるので、利用者は若者ばかりでなく、家族連れ、退職老人も大変多いのです。お酒を飲んで騒いだり、花火や音楽の騒音をまき散らす者など皆無で静かなものです。日中も終日読書などして、一週間で単位で利用する人が多いのでした。食事にしても、とりたててごちそうを食べるといふこともなく、ソーセージなどを焼いて簡単なサラダとパンですませるといふ具合です。たまたま隣り合わせにテントを張った家族から、ほうれん草とりんごをマヨネーズであえた

二品だけのサラダというのを教えてもらったこともあり、家族ぐるみの楽しい触れ合いが多いのも嬉しいことでした。退職してから全米を旅行しているのだと言って、キッチンやトイレ、シャワー、ベッド付きの豪華キャンピング・カーの中を得意そうに見せてくれた老夫婦は、たき火で焼いたマッシュマロを子どもたちにごちそうしてくれたり、子供同士で仲良くなったのにな、もう別れなければならぬと知って泣き出しそうになった小さい女の子がいたり、キャンプ旅行の思い出は、ささやかでも、心の奥深くに残るようなものばかりです。

日本に帰ってから私たちは日常生活に不便を感じてというよりも、家族で遠出をする時の交通費の高いや、重くてかさばる荷物の持ち運びの負担、交通機関の運行ダイヤによる制約という不便等を考えて車を買うことにしました。それからは、デンバーのような旅行ができたかという、これは絶望的なほどにいかせませんでした。まず東京の市内を脱出するのに渋滞

にひっかからないことはなく、脱出してもその先の高
速道路であれ、一般道であれ、どこもかしこも混んで
いるのです。目的地にたどり着くまでには、景色を楽
しむどころかイライラが募り、身も心も疲れきってし
まいます。キャンプ場は日本には少なく、オートキャ
ンプ場などは今でも数えるほどしかありません。我が
家が何度か訪れた乗鞍高原は、駐車場から最も奥まっ
た所にキャンプ場があり、テント等を運び上げるのが
容易ではありません（涼しさや周囲の景色のよさは一
級ですが）。日本に車はあふれているものの、日本は
車社会としては余りにも未整備であることをつくづく
思い知った次第です。それでも、そういう状態の日本
で乗用車の売れゆきが増えます好調だといえるのですか
ら驚いてしまいますが、その流れを変えることは時代
に逆行することになるでしょう。アメリカやカナダと
日本とは、土地の広さも歴史的経緯もあまりにも違
い過ぎて、比較のしようもないように見えます。た
だ、東京のような大都市では一見不可能に見えるもの

の、地方都市の中には、平地に恵まれ、公共の交通機
関も未発達であったためにかえて車社会としての意
図せぬ整備が進みつつある所が見受けられます。けれ
どそれに、計画的な町づくりの視点を持った強力な行
政力が加わらないと理想には遠い結果が生じてしま
うかもしれません。

デンバーから帰って六年になる我が家ですが、今度
は、ブリュッセル（ベルギー）へ夫が単身赴任とな
り、一年ほどすると、家族も行くことになりそうな気
配になってきました。アメリカの地方都市での生活を
体験したとは言え、そこで得たもの、学んだことを、
帰国後の生活で十分に活用できたかということになる
と、家族キャンプの例ではありませんが、彼我の違い
の大きさに半ば絶望的になってしまい、満足は得られ
ずじまいです。今度、ヨーロッパを体験できるとなれ
ば、二者択一ではないやり方を見出すことができるか
もしれません。古い歴史と伝統を持っているという点
でヨーロッパと日本は似ていますし、地理的にも狭く

て山がちな国がヨーロッパならあるのですから。

思えばアメリカは、子供の頃からテレビや映画を通じて私たち日本人にとって豊かさや自由を体現して見せてくれる憧れと称賛の対象でした。私たち一家がデンバーへ行くことになった時、私にとってのアメリカは、その幼ない頃抱いたままの偉大なイメージを持っていました。「大草原の小さな家」「セサミストリート」の放映が始まってまだ間もない頃だったと思いますが、一方で、私は、私たちのような平凡な人間が、転勤で移り住むようになったという事実そのものに、時代の流れを感じてもいたのです。ベトナム戦争を境に自信を失ったアメリカが少しずつ私の前に姿をあらわしてきました。私の予想に反して暗く寂しく見えたデンバーの夜景、空港からの車から見る通りの暗さは、季節的に最も暗い時期に当たっていたことや、私自身の心細い心理を考慮に入れてもなおかげりや衰退の子兆であったとしか言いようのないものを含んでいました。東京都内に住んでいた感覚が私にそん

な印象を抱かせたのでしょう。ニューヨークやLAでなく、そこはいくら大都市とは言えアメリカでは地方都市に過ぎないデンバーでしたから。それに又、ダウンタウン（市の中心街）と郊外の住宅地という違いもあったかもしれません。土地が広いために何もかも拡散して見えたということもあるでしょうか。が、住み慣れるにつれ、そんなことは次第に忘れかけていた頃、我が家では、アメリカ国内での国立公園巡りも行くような所はあらかた走破し（本当は走りぬげるだけではもったいない）、ついにカナダへ出ることにになり、陸地で国境を越えるという初めての体験をした時のこと、道路の制限速度の表示がマイルからキロメートルに変わったことと共に、その舗装や分離線など、道路の管理状態が急に良くなったことに気付いて驚きの声をあげたのでした。国境線を境に気象条件の厳しいカナダ側の方が、道路の状態は歴然とよかったです。私が感じたのは、ああ、アメリカはもう、かつてのように豊かで栄光に満ちた国ではなく、下り坂をた

どり始めたのだということでした。国立公園の施設自体も管理状況もキャンプ場巡りをしていると一層その差が読みとれるのでした。

デンバーで暮らすようになって、初めは、子どもたちは鉛筆一本持たず、手ぶらで（お弁当は別）通学していたのが、年々、歳出削減の影響で、鉛筆や用紙を持参しなければならなくなっていき、両親教育のプログラムもついになくなっていったりしました。そんな動きも私にはアメリカの衰退の影を見たように思います。逆に、標高が高く、半年は雪道走行の可能性があるデンバーで、信頼性の高い車として日本車を選ぶ人々の多いことは、日本の自動車産業の強さを日本国内にいる以上に見せつけられ驚いたものでした。パトローカーはアメリカ製だったものの白バイに当たる警察のオートバイは日本製ばかりで、しかも私たちがそのことに目を止めてしげしげと見つめてみると、「どうだい、すごいだろう」と自慢そうに言うのには更に驚かされました。

また、あるオーブンルーム式の中学校を見学させてもらった時には、その立派な設備にさすがはアメリカと感心することしきりであったのが、生徒たちの個人レッスン用のピアノのすべてがこれまた日本製であると気付いて、日本の製造業の強さに目を見張ったのでした。その学校は、デンバー市内ではなく市郊外の有数のお金持ちの住宅地にあり、日本の公立中学ではとても太刀打ちできない豪華さでしたが、六年後の今となると、日本の公立学校も平均すると決してひけを取らないほど立派な施設を整え始めているようです。アメリカでは公立の学校といえども、貧富の差が激しく、貧乏な地区となると、日本の公立校にはるかに及ばないことでしょう。

当時の私のこのような驚きは、誇らしげにオートバイやピアノ、カメラを見せて、日本人に日本製品の優秀さを誇って見せるといふ愚を演じる羽目に陥らされたアメリカ人の現在の怒り（激しくなる一方の日米経済摩擦）を予測する所まででは行っていないませんでした。

アメリカ人は、私たちが気付いて指摘するまではそれが日本製だなどとは露ほども思っていないという人が何人もいたのですが、ことさらに日本製だということを書り物にしない限り気付かないというそのことで彼ら責めるわけにはいかないでしょう。私たち日本人でさえ国内においては気づかなかったのですから。

翻って、日本に帰ってからの日本の変化もまた、驚くべきものがあります。日本人の家は狭いとは言え、洋式の生活スタイルはすっかり定着し、ダイニングテーブルやソファ、ベッドという形は今では当たり前になっていますし、トイレも洋式が着実にふえています。台所もあいかわらず狭いものの、呼び方だけはアメリカのようなシステムキッチンがふえています。前にも書いたようにマイカーがふえ続け、駐車場付きのファミリー・レストランがあちこちにでき、郊外には広い駐車場を売り物にしたショッピング・センターやディスカウント・ストアが出現しています。服装もヨーロッパやアメリカに負けず劣らず華やかあり、ス

ポーターあり、ゴルフやテニス、スキー、ダイビング等のスポーツ人口も増加の一途です。海外旅行者の数もふえ続け、その変化のスピードはアメリカにも勝っているのかもしれない。

帰国したばかりの頃は、学校でのいじめのニュースが多く、帰国子女は厄介者扱いでしたが、今では企業が積極的に採用し、就職の際には、語学力や国際感覚を見込まれて売り手市場の感すらあります。短期間にこれだけの変化を見聞きすると、逆に何が不変で、何を頼りにしたらよいのかわからなくなってきました。今では、学校での最大の問題は、校内暴力やいじめよりも、登校拒否に重点が移ってきているというのも、何やらうなずける思いがしてきます。大人たちでさえ、自信を持って言えることというのがなくなってきたるのであれば、子どもたちが不安になるのは当然でしょう。

現在、我が家では、長女が高校二年、次女が小学六年で、どちらも節目にかかっています。長女は進学や

職業の選択で大いに悩み、戸惑っていて、そのことが私たち両親にとっても悩みです。自分たちの時代は現在に比べて貧しく不自由であったためにかえって選択の余地はなく迷いは生じにくかったです。ところが今は、世界中が激動の時代に入り、選択の幅は大いに広がったものの、自分が本当にやりたいと思うことを見つけることが大変困難になってしまったのです。いくつもの選り取ることでできなかった選択肢が、未練として残る恐怖とでも言うものが、若くて真摯な者を脅かしているのです。母親として私はその悩みや恐怖を感じている娘に寄り添っていくことしかできません。今、私に彼女の若さだけが追加されたら、歩みたいという道はいくつかあるものの、それは所詮私の夢であって長女のものではないのです。そこが苦しい所ですが、今はじっとこらえて寄り添い、待つしかありません。それに、選りよったとしても、その結果が、望んでいた方向に向いてくれるかどうかもわかりません。時代の流れによっては一寸先も見えないよう

なことになるのかもしれませんが、そう思うと自分のこと以上不安に襲われるのです。ただ言えるのはどんな事態になっても、たとえ一時的にうろたえても、気を取り直して前向きに歩んでいけるようにと娘に自分に願うのみです。男女平等社会が開けてきた今の時代の方が、女性にとっての正念場、そういう時代を受験期に迎えることになった長女の方が、私より困難を多く抱えることになったという気がしています。私自身が職業についていない今、適切な指針を与えてやれる自信はありません。長女自身が切り拓いていく道を歩んで行ってほしいと願うだけです。

そんなわけで、長女については、ブリュッセル行きが決まったとしても同行するかどうか全く未知数です。次女の方は、義務教育段階にある限りは私たち両親のいる所へ連れて行きたいと思っています。日本人学校にあきがなく入れないということになっても連れて行くという方向で考えているのです。考え方はいろいろあるでしょうが、私としてはできる限り家族が

一緒に暮らせることを優先させたいと思っています。私自身がこれまで、自分の職業上のキャリアを断念して、家族と共にあることを最優先してきたことの延長でもあり、自分の手をかけて子どもを育てることのほぼ最終局面での大切な時期でもあるからです。中学生、高校生の時期は、子どもと大人が交互に顔を出すような不安定な時期でもあり、それだけに、幼い頃からの一貫した何かが明らかになって、こちらを驚かせたり楽しませたりしてくれる大変面白い時期だからでもあります。

望んでも子どもを授からない人もあるというのに、産み、そして育て始めたからには、とことんつき合っ
て楽しむのもひとつの生き方です。今の時代にあつてはその考えは逆風にさらされてはいるものの、それこそいづれ見直される時期がくるというものです。なかなか変化しないように見えた学校も、ようやく週休二日制を試行するところまでやってきています。週休二日にしろ、夏休み等の長期休暇にしろ、家族が共に過

ごす時間がふえるのは日本人にとってとても良いことだと思えます。豊かになるにつれ、バラバラの方を向いている人ばかりになるのでは、何の為の豊かさかわかりません。本当に大切にしたいことは何なのかを見極めることは、子どもにも青年にも老人にも、私たち中年にも今最も必要なことになってきたのではないのでしょうか。

(はるにれの会)

